東海学園大学教育研究紀要　第９号：34-54，2024

〈原著論文〉

愛知県第一高等女学校における卒業生の進路
―同窓会誌『あゆち』昭和戦前期の記述内容を中心に―

烏田直哉 *

はじめに

本稿では、名古屋市における高等女学校卒業生の進路、とりわけ昭和戦前期の愛知県第一高等女学校卒業生の進路について、学校史、あるいは同窓会誌、同窓会名簿から明らかにする。これまでの研究で、中部地方の各都市（大垣、長野、松本）における、高等女学校の卒業生進路について分析が行われている[1)]。本稿では中部地方における最大都市（人口、昭和 10 年）[2)] である名古屋市の高等女学校卒業生進路について分析する。

高等女学校の社会的機能に関する先行研究の知見から、親の職業が高等女学校への進学（あるいはその後の、補習科や専攻科など附設課程も含めた進学）と関わりがあること、高等女学校卒業とその後の結婚あり方が強く結び付いていたこと、「良妻賢母」を育てることを前提としつつも時代を経るに従いその性格が変化し「職業資格」を与えるという機能が強まったこと、などが分かる[3)]。本稿では、こうした高等女学校の性格を踏まえた上で、名古屋市においてどのような特色がみられたのかを考察するとともに、愛知県第一高等女学校がどのような社会的機能を果たしていたのかを考察する。一事例を示す史料として、愛知県第一高等女学校の同窓会員名簿や同校の同窓会誌『あゆち』などを用いる[4)]。

1．名古屋市内の高等女学校設置状況

名古屋市内の高等女学校設置状況、沿革等についておさえておく[5)]。名古屋市において、また、愛知県においても、最初に設置された高等女学校は、明治 29（1896）年 6 月に中区に開校した名古屋市立高等女学校（後、名古屋市立第一高等女学校、以下、「市第一高女」とする）であった。生徒数の増加とともに校舎狭隘となり、県立高等女学校設置の機運が高まった。しかし、次に開校されたのは、明治 35（1902）年 4 月の豊橋町立高等女学校（後、豊橋市立高等女学校）であった。名古屋市内に県立高等女学校ができたのはその後である。明治 32（1899）年の高等女学校令、同 34 年の高等女学校令施行規則をうけ、明治 36（1903）年 3 月、東区に愛知県立高等女学校（後、愛知県第一高等女学校、以下、「県第一高女」とする）が開校した[6)]。明治 34 年には、先に設置された市第一高女を県立に変更するという議論もあったようだが実現しなかった、と『愛知県第一高等女学校史』には記述されている[7)]。

【図表 1】県第一高女本科・技芸専修科における入学志願者・合格者

年度	本科			技芸専修科		
	志願者	合格者	倍率	志願者	合格者	倍率
明治 36	378	80	4.7	60	40	1.5
明治 37	292	80	3.6	63	40	1.6
明治 38	474	79	6.1	86	40	2.2
明治 39	602	79	7.6	78	39	2.0

（「表 3　入学志願者と合格者」愛知県第一高等女学校史編集委員会編『愛知県第一高等女学校史』愛知県第一高等女学校史刊行会、昭和 63 年、15 頁より。）

※倍率は表記のまま。

県第一高女においては、【図表 1】の通り、明治 36（1903）年、本科第 1・2 学年各 40 名の募集に対して 378 名の志願者、技芸専修科第 1 学年

* 東海学園大学教育学部

40名の募集に対して60名の志願者があった[8]。県第一高女の本科は修業年限4年、技芸専修科は2年であった[9]。この技芸専修科は、明治41（1908）年度から修業年限3年となった。さらに明治43（1910）年10月の高等女学校令改正にともない、翌明治44（1911）年2月、技芸専修科は修業年限4年の実科に改められた[10]。実科の設置により、それまでの技芸専修科は大正2（1913）年3月に廃止となった[11]。しかし、この実科も大正12（1923）年に廃止となっている[12]。

明治38(1905)年4月からは、修業年限1年の補習科が置かれた[13]。補習科は本科の卒業生を受け入れ、その目的の第一は、「本科より高度の教育内容を学習し、上級学校へ進学すること」、第二は「家庭生活に必要な家事や裁縫などの技術の修得」[14]であったとされている。この補習科も大正11（1922）年に廃止された[15]。補習科は廃止されたが、短期間で家事・裁縫等を修得できるという利点のためか、大正12年4月に和楽会設置の「講習科」が設けられた[16]。

技芸専修科や補習科など、県第一高女のこうした附設課程は廃止されたが、大正9（1920）年の高等女学校令改正の後、大正11（1922）年4月に専攻科（国語部、英語部）が新設された。高等女学校卒業を入学資格とし、修業年限は3年とした。専攻科に加え、大正13（1924）年3月「愛知県高等女学校学則」の改正とともに、修業年限3年の高等科が置かれた[17]。それまでの国語部を専攻科とし、英語部を高等科とした。『県第一高等女学校史』では、この高等科の講師に「名古屋医科大学や第八高等学校の教授を委嘱」したことを示し、高等科は「女子の高等教育の学校設置の布石」[18]であったとしている。一方で国語部の専攻科の方は大正14年3月から募集停止した[19]。長野県女子専門学校のように、附設課程が女子専門学校に昇格、あるいは改組した例は一部に限られていた[20]。

大正11年3月、県第一高女と市第一高女の修業年限が5年となった[21]。また、私立の愛知淑徳高等女学校が大正15年に5年制となった[22]。

県第一高女は、愛知県女子師範学校に愛知県立第二高等女学校（設置当初は西春日井郡金城村）が併設されたことにともない、大正4（1915）年4月、校名を「愛知県立第一高等女学校」に改称した。

明治終わりから大正期には私立高等女学校も新設された。明治39（1906）年設置の愛知淑徳高等女学校（名古屋市東区東新町）に続き、大正5（1916）年9月設置、同6年4月開校の椙山高等女学校（東区富士塚町）、大正8(1919)年1月設置、同4月開校の皇華高等女学校（中区不二見町、昭和5年に廃止）[23]、大正10（1921）年2月設置、同4月開校の名古屋高等女学校（東区葵町）、大正10（1921）年3月設置、同4月開校の中京高等女学校（中区南新町）、大正12（1923）年2月設置、同4月開校の桜花高等女学校（中区緑町）など、東区や中区を中心に私立高等女学校が続々と設置された[24]。

2. 高等女学校卒業生の進路

次に、名古屋市における高等女学校卒業生の進路について検討する。【図表2】【図表3】は『全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査』中、「前学年度卒業者状況ニ関スル調」にある進路の概況である。【図表2】には「更ニ学校ニ入リタルモノ」「教員トナリタルモノ」「其他ノ職ニ就キタルモノ」「其他ノ者」の人数を、【図表3】にはその構成比を示した。「更ニ学校ニ入リタルモノ」についてみると、愛知県、名古屋市においてはほぼすべての年において全国平均とくらべ低い値を示している。愛知県でもいち早く設置された市第一高女においても、愛知県平均を上回る年は多いが、全国平均と比べると多くの年で下回っている。ただし、県第一高女においては、特に1930年以降、常に全国平均よりも高かった。具体的な進路については後に述べる。

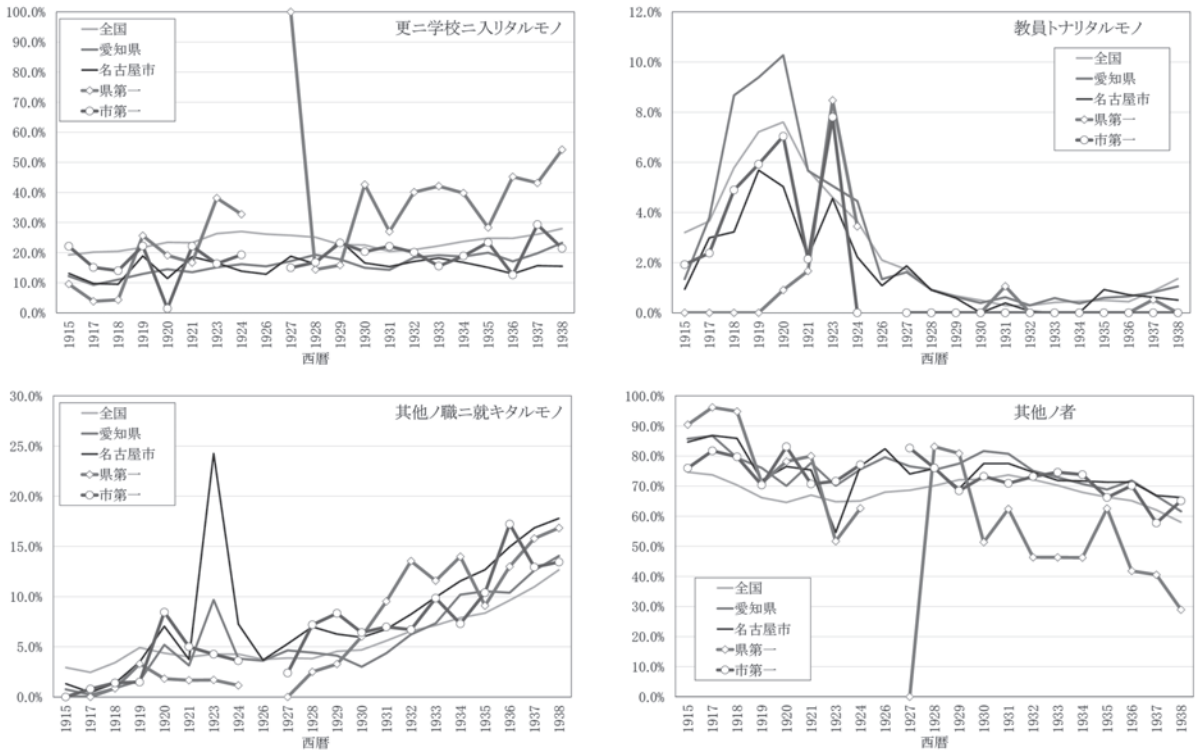
市第一高女の進路について、もう少し詳しくみてみよう。昭和期における市第一高女の進学先について、同校の『創立四十周年記念　学校概覧』に記載があった。【図表4】で昭和7年から11年における市第一高女の上級学校入学者をみると、最も多いのが「桜菊」、すなわち各種学校の桜菊女子学園であっ

【図表 2】『全国〈高等女学校実科高等女学校〉ニ関スル諸調査』にみる高等女学校卒業者の進路

西暦	更ニ学校ニ入リタルモノ					教員トナリタルモノ					其他ノ職ニ就キタルモノ					其他ノモノ				
	全国	愛知県	名古屋市	県第一	市第一	全国	愛知県	名古屋市	県第一	市第一	全国	愛知県	名古屋市	県第一	市第一	全国	愛知県	名古屋市	県第一	市第一
1915	2,622	62	44	11	23	383	6	3	—	2	455	2	2	—	—	10,324	397	263	104	79
1917	3,178	56	37	4	19	455	20	9	—	3	317	2	2	—	1	11,780	514	327	101	103
1918	3,468	74	43	5	20	796	43	14	—	7	447	7	6	1	2	11,970	549	378	110	114
1919	3,831	120	87	31	30	1,003	64	24	—	8	802	16	14	4	2	12,385	616	313	86	95
1920	4,832	93	48	21	2	1,204	61	23	1	10	774	46	37	2	12	13,859	604	374	86	118
1921	5,845	161	114	20	31	1,111	52	14	2	3	856	35	24	2	7	17,106	843	471	96	99
1923	8,614	213	128	45	23	1,268	66	39	10	11	1,305	250	245	2	6	21,251	912	457	61	101
1924	10,501	298	163	57	32	1,155	69	29	6	—	1,530	106	95	2	6	25,642	1,449	822	109	128
1926	13,645	357	151	—	—	922	33	16	—	—	1,854	90	43	—	—	35,588	1,901	902	—	—
1927	14,810	353	163	16	25	881	56	34	—	—	2,114	120	79	0	4	40,116	1,999	1,057	0	138
1928	15,542	365	144	23	28	534	26	12	—	—	2,325	109	69	4	12	44,398	1,977	846	133	127
1929	15,431	428	215	29	39	422	15	6	—	—	2,923	112	68	6	14	48,776	2,109	835	148	115
1930	15,781	403	179	78	38	311	8	—	—	—	3,092	85	58	11	12	50,960	2,002	733	94	137
1931	14,858	410	186	51	38	187	20	6	2	—	3,592	134	81	18	12	54,265	2,313	927	118	122
1932	15,524	547	230	77	36	168	7	1	—	—	4,304	194	106	26	12	53,802	2,284	899	89	131
1933	16,034	495	205	80	30	220	11	—	—	—	4,702	188	94	22	19	51,829	1,939	709	88	144
1934	17,264	483	201	74	44	232	10	—	—	—	5,541	256	125	26	17	49,205	1,938	814	86	172
1935	17,723	465	180	53	54	350	9	3	—	—	6,070	268	114	17	24	48,112	1,909	768	117	153
1936	19,077	455	172	80	30	255	14	4	—	—	7,449	313	175	23	41	49,853	2,172	835	74	167
1937	21,342	596	246	82	68	545	18	7	1	—	9,170	383	181	30	30	51,347	2,140	852	77	134
1938	24,016	709	254	103	51	958	26	2	—	—	11,276	438	200	32	32	50,840	2,150	945	55	155

〔文部省普通学務局編『全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査』、大正5～昭和15年(国立国会図書館デジタルコレクション)より作成。【図表3】も同じ。〕

※「名古屋市」として集計したのは、設置当初の設置場所が「名古屋市」であった県第一、市第一、市第二、愛知淑徳、椙山第一、皇華、中京、名古屋、桜花、椙山第二である。



【図表 3】高等女学校卒業者の進路（卒業者数に占める比率）

た。同校は、ガス事業の発展に寄与した岡本櫻[25]が私財を投じて創立したものである。「中京人の生活改造」のため、「先づ上流の家庭の婦人に、新しい家庭の文化知識を授ける」[26]ことをねらった。幼稚園も擁し、大正 14 年の春に開校した。昭和 13 年発行の『岡本櫻傳』によると、「現在の学園には、本科、選科の生徒が百六十名、幼稚園の児童が七十五名、通算して二百三十五名ほどゐる。それは何れも名古屋の一流家庭の子女たち」[27]であった、とされている。桜菊女子学園の「月謝は年額八拾八円」であり、同じ頃の金城女子専門学校[28]（金城女学校専門学部）と同額である[29]。桜菊女子学園についで、金城女

子専門学校へ33名、女子師範学校第二部へ11名、また、具体的な学校名は分からないが、医専や薬専へ9名が進んでいる。市第一高女の同窓会である松操会の『昭和十三年十二月　会員名簿』によると、同校の昭和11年3月卒業者が「二三八名」[30]であった。図表には示していないが、市第一高女の『学校概覧』中、「昭和十一年三月卒業生就職調べ」によると、41名が就職したことがわかる[31]。昭和10年頃の市第一高女では、進学者と就職者が合わせて3割、7割はその他ということになろうか。

【図表4】市第一高女における「卒業生上級学校入学者調べ」（最近五ヶ年間）

学校名＼年度	昭和十一年	同十年	同九年	同八年	同七年	計
女高師	2	0	0	0	0	2
女子大	2	0	0	0	0	2
医専	1	1	1	1	0	4
薬専	1	0	1	3	0	5
美術学校	1	0	0	0	0	1
保姆養成所	1	0	0	0	0	1
女師二部	3	2	1	3	2	11
金城女専	2	5	8	10	8	33
桜菊	15	15	13	13	10	66
県一高等科	1	0	0	0	2	3
県二専攻科	1	0	0	0	0	1
計	30	23	24	30	22	129

〔名古屋市立第一高等女学校編『創立四十周年記念学校概覧』、昭和11年10月、127-128頁より（鶴舞中央図書館蔵）〕

※「桜菊」は各種学校の桜菊女子学園（名古屋市東区徳川町）（『愛知県教育史　第四巻』、745頁参照）。

2校のみ、一時期に限定した範囲であるが、県第一高女は「上級学校への進学状況は、かなり高い」「国公立の専門学校などへの合格率や、その他の有名校、女子師範への合格率は、東海第一」[32]と評される状況であった。一方で、市第一高女は「フィニシングスクール」[33]という側面が強かったのか、卒業生の一人は以下の様に述べている。

> 「県一」の人は、もっと上へ上がるという気持ちがあったと思うんです。「市一」の方は上の学校へ行く人も相当ありましたが、卒業したら、じきに結婚するという人が多かったんです。お嬢様なんです。だから、勉強というより、お稽古事を毎日やらされました。[34]

「市一」の進路については本稿では詳述しないが、【図表3】からみても、この卒業生の言う進路に関する言及は妥当であろう。

高等女学校入学者の族籍や親の職業についてふれておく。『日本近代教育百年史』では、明治34（1901）年の「表26　高等女学校卒業生の出身階層」を示して、「士族出身者の割合は、ほぼ六割に達する」[35]「士族層を基盤とした専門職や上級ホワイトカラーなどの近代的職業の家庭が多いように思われる」[36]と記されている。また、吉田文は「商業を家業とする女子に、対人関係を中心に、義務教育以上の教養が必要だと考えられていた」「農家の場合には、富裕であっても女子に教育は不要とする考えが根強くあった」[37]としている。族籍については、管見の限り部分的にしか分からない。県第一高女の『自明治三十六年三月至明治三十九年三月愛知県立高等女学校一覧』中、「第七章　生徒（明治三十九年四月調）」[38]では、明治39年における生徒数を「族籍別」に集計している。これを【図表5】に示した。これを見る限り、県第一高女においては、「士族出身」は3割弱ということになろう。

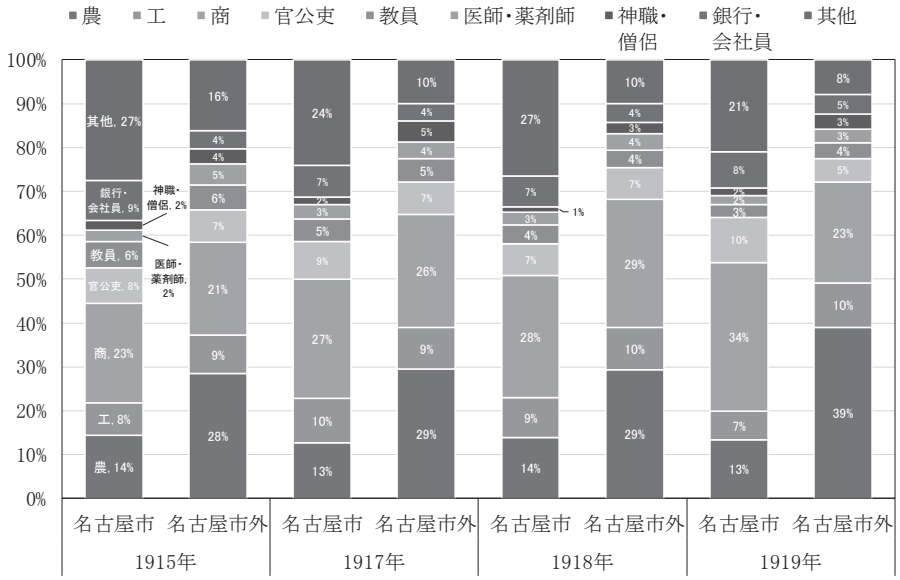
親の職業については、『愛知県統計書』から数年間継続して把握することができる[39]。『愛知県統計書』中、「管内学事ノ状況」から、県内高等女学校の「父兄職業」を見てみよう。【図表6】は、1915（大正4）年から1919（大正8）年までの、高等女学校入学者における親の職業の構成比を示したものである。名古屋市に設置された学校の「父兄職業」をみると、農

【図表5】県第一高女生徒「族籍別」（明治39年4月調）

籍＼学級	本科 補習	本科 4年	本科 3年	本科 2年	本科 1年	技芸専修科 2年	技芸専修科 1年	計	比率
華族			1					1	0.3%
士族	1	15	18	26	15	10	10	95	27.2%
平民	4	21	60	53	65	22	28	253	72.5%
計	5	36	79	79	80	32	38	349	100.0%

（愛知県立高等女学校編『自明治三十六年三月至明治三十九年三月愛知県立高等女学校一覧』、明治39年、81頁より。）

※縦書きを横書きに、漢数字を算用数字に改めた。
※「比率」は筆者が付記した。



〔各年の「附録　管内学事ノ状況」(愛知県編『愛知県統計書』愛知県、大正 7～大正 12 年)より作成。〕

【図表 6】高等女学校入学者の「父兄職業」

業従事者の占める割合が低く、銀行・会社員やその他の占める比率が高いことが分かる。

また、市第一高女の『創立四十周年記念学校概覧』にある、「生徒家庭職業別調」をみると、農業従事者はわずか1%にも満たず、およそ7割が第三次産業従事者である（【図表7】参照）。

断片的な情報ではあるが、以上のように「出身階層」という観点でみると、名古屋市においては、先行研究の言う高等女学校設置の一定の社会的条件が整っていたと考えられる。

【図表 7】名古屋市立第一高等女学校の「生徒家庭職業別調」

	一年	二年	三年	四年	五年	計	
商業	57	77	66	88	77	365	(31.0%)
工業	20	12	13	12	10	67	(5.7%)
会社員	49	44	29	29	27	178	(15.1%)
銀行員	13	6	9	2	2	32	(2.7%)
官公吏	25	14	13	16	11	79	(6.7%)
軍人	1	—	—	2	1	4	(0.3%)
教員	8	15	18	9	12	62	(5.3%)
医師	9	6	12	7	12	46	(3.9%)
薬剤師	1	2	5	—	2	10	(0.8%)
僧侶	1	4	4	3	4	16	(1.4%)
料理業	1	2	1	2	2	8	(0.7%)
農業	1	2	6	1	1	11	(0.9%)
建築土木業	4	3	3	4	—	14	(1.2%)
弁護士	—	3	2	1	—	6	(0.5%)
旅館経営	—	2	1	2	—	5	(0.4%)
染色クリーニング業	1	4	4	2		11	(0.9%)
無職	30	32	36	39	56	(マヽ) 194	(16.5%)
その他	21	13	12	12	11	69	(5.9%)
計	242	241	234	231	228	1176	(100.0%)

〔名古屋市立第一高等女学校編『創立四十周年記念　学校概覧』名古屋市立第一高等女学校、昭和 11 年、79-80 頁(名古屋市鶴舞中央図書館蔵)より作成。〕

※縦書きを横書きに、漢数字を算用数字に改めた。
※本表最下行の各学年「計」、( )内の比率は筆者が付記した。

3. 同窓会誌『あゆち』にみる愛知県第一高等女学校卒業生の進路

【図表 8】は、同窓会誌『あゆち』に掲載されている、大正期の県第一高女卒業生の進路である。【図表 8】から、この間、上級学校進学者の半数以上が高等科や専攻科などの附設課程に進んでいたことが分かる。ついで、女子師範学校第二部への進学がおよそ 23%を占めていた。専門学校の進学先としては、医学、歯学医学、薬学の専門学校が合わせて 12 名となっている。高等師範学校への進学者は 18 名中 16 名が東京女高師であった。【図表 9】は、学校史に掲載されている、昭和期における卒業生の動向である。この数年間では変化を捉えづらいが、昭和 8 年、9 年では家事従事者が最多を占めており、昭和 10 年、11 年においては上級学校志願者がそれを上回っている。また、就職希望者が昭和 12 年になると 2 割をこえている。

より具体的な進路について、主に、次に述べる史料から検討する。一つは県第一高女の同窓会である

和楽会[40]が発行した、『昭和一年客員及会員名簿』[41]である。『名簿』には、明治38（1905）年第１回卒業生から、昭和11（1936）年卒業生まで4,700名余りの住所等、旧姓、氏名が記載されている。

もう一つは、和楽会発行の同窓会誌『あゆち』[42]にある「会員消息」等（以下、単に「会員消息」とする）に記述されている卒業後の状況である。『あゆち』第20号（大正15年６月）末尾には、「和楽会々員に御願ひ」として、「次号には和楽会員の消息をなるべく多く掲げたい」「仮令一紙半行でも皆様の御動静を御報知下さる事」[43]を呼びかけている。

次号『あゆち』第21号（大正15年12月）には、「和楽会員消息」として、明治39年本科卒業生から大正９年本科卒業生までの「消息」が掲載された。同誌21号に掲載されたもっとも若い卒業生は６年前の卒業生ということになる。「今まで人事と申しますかもつと／＼大人の方々の御事の様に存じてをりましたあゆちへの消息に私共も最早のせねばならぬ事を知り、今更乍ら、自分の年をかぞへて見ました」[44]との記述から、卒業後の一定期間を経た後に「消息」に掲載することになっていたことが推察される[45]。

【図表８】県第一高女における大正期の進学先

上級学校	卒業・修了年月					
	大正11年3月	大正12年3月	大正13年3月	大正14年3月	大正15年3月第4学年修了	計
東京女子高等師範学校	1	4	5	6		16
奈良女子高等師範学校			2			2
東京音楽学校	1		1			2
日本女子大学校		4	1	1		6
東京女子大学校	1	1				2
女子英語塾		1	1	2		4
女子医学専門学校	2	1	3	3		9
東京女子歯科医学専門学校	1		1			2
東京女子薬学校				1		1
本校高等科及専攻科		26	34	29	17	106
女子師範学校第二部	4	8	8	14	10	44
計	10	45	56	56	27	194

（愛知県第一高等女学校和楽会編『あゆち』第20号、大正15年６月、239頁より。）

※縦書きを横書きに、漢数字を算用数字に改めた。また、表中最右欄「計」は筆者が付記した。
※愛知県第一高等女学校史編集委員会編『愛知県第一高等女学校史』愛知県第一高等女学校史刊行会、昭和63年、131頁にも同様の記載あり。

【図表９】県第一高女における昭和期の進路希望

年次	入学志願者	入学者	卒業者	上級学校志願者	就職希望者	家事従事者
昭和７	451	199	192	83 (43.2%)	35 (18.2%)	74 (38.5%)
昭和８	451	200	190	74 (38.9%)	36 (18.9%)	80 (42.1%)
昭和９	451	199	186	59 (31.7%)	30 (16.1%)	97 (52.2%)
昭和10	372	198	187	96 (51.3%)	18 (9.6%)	73 (39.0%)
昭和11	362	197	177	96 (54.2%)	34 (19.2%)	47 (26.6%)
昭和12	379	200	190	74 (38.9%)	41 (21.6%)	75 (39.5%)

（「表15　本科生の動向（昭和７～12年）」愛知県第一高等女学校史編集委員会編『愛知県第一高等女学校史』愛知県第一高等女学校史刊行会、昭和63年、181頁より。）

※「比率」は「卒業者」に占めるものであり、筆者が付記した。

この『名簿』と「会員消息」の記述とを照らし合わせた結果が【図表10】である。卒業後、なるべ

【図表10】本稿で対象とした通信欄掲載者

情報源とした『あゆち』	卒業年西暦	学科	進学・その他の学修	就職	裁縫等稽古・家事	その他	死去	不明	総計
22号（昭和２年発行）	1924	大正13年本科	27	2	15	1		9	54
	1925	大正14年本科	25	3	10	3	1	2	44
		大正14年専攻科	15	5	11	1		4	36
	1926	大正15年専攻科	14	5	10			6	35
25号（昭和４年発行）	1925	大正14年本科	2		5			2	9
	1927	昭和２年本科	8	2	38			7	55
		昭和２年専攻科	2	2	2			2	8
		昭和２年高等科	10	1	11			1	23
30号（昭和７年発行）	1927	昭和２年専攻科	3		1				4
	1928	昭和３年本科	9	7	45	3		13	77
		昭和３年高等科	6		4			1	11
31号（昭和８年発行）	1929	昭和４年高等科	13	2	4	1		1	21
	1930	昭和５年本科	6	1	14			5	26
		昭和５年高等科	3	1	6			2	12
33号（昭和11年発行）	1933	昭和８年本科	13	9	15	2		1	40
		昭和８年高等科	3		4			5	12
	1934	昭和９年本科	10	5	31		2	7	55
		昭和９年高等科	8	3	2			1	14
39号（昭和16年発行）	1935	昭和10年本科	7	2	27	2		3	41
		昭和10年高等科	6	1	4			6	17
計			190	51	259	13	3	78	594

〔愛知県第一高等女学校和楽会編『あゆち』（第22～39号、昭和２～16年）、愛知県第一高等女学校和楽会編『昭和一年客員及会員名簿』（昭和11年12月）をもとに作成。【図表11】【図表13】【図表14】も同じ。〕

く早い時期の状況を把握するため、それほど年数が経過していない卒業生を対象とした。「なるべく多く掲げた」のは第21号からであるが、同号の「消息」に掲載された最も若い卒業生である大正9年本科卒業生の欄には、返事のない者も多かったとある。断片的にはなるが、本稿では、第22号以降を中心に、『あゆち』に掲載されている「会員消息」等の通信欄記述内容を情報源とし、そこから分かる範囲で、その記述内容から卒業後の進路をみる[46]。

（1）進学

①専門学校、女子高等師範学校

まず、専門学校や女子高等師範学校へ進学したケースである。【図表11】の通り33例を確認できた。そのうち最多の8例が東京女子医学専門学校であった。通信欄の内容をみると、「東京の女子医専にお過しになつていらつしやいます」「第一期の卒業試験が控へてゐますが、それに幸に通過しましたら、どうやら聴診器も手にする事が出来ます」[47]のような記述が見られた。東京女子医学専門学校へは「県立出身の方も沢山居られ」[48]るとの記述にみられるように、一定数が同校へ進学したものとみられる。「東京女子医学専門学校に、（中略、2名）のお二人と御一所に御在学中でございます」[49]、「（前略）母校から一緒の同級生は（中略、3名）それに私の四人で、唯今本科三学年でございます」[50]のように複数名の氏名がみられる。なお、このうちの一人には、『名簿』の住所欄に「東京女子医学病院小児科」[51]とあった。

【図表11】通信欄から判明した進学先学校名

進路分類	進学先	卒業年西暦										計
		1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1933	1934	1935	
帝国大学	東北帝国大学				1							1
専門学校・高師	日本女子大学校					1			1			2
	津田英学塾		1									1
	同志社女子専門学校					1						1
	東京女子医学専門学校	3			1			4				8
	私立聖心女子学院高等専門学校				1							1
	東京女子大学										1	1
	東洋女子歯科医学専門学校				1							1
	帝国女子薬学専門学校									2		2
	実践女子専門学校					1						1
	帝国女子医学薬学専門学校								1			1
	共立女子専門学校									1		1
	金城女子専門学校					1		1				2
	東京女子高等師範学校		3						1			4
	奈良女子高等師範学校	1			2							3
	不明					3					1	4
師範学校・その他教員養成諸学校	三原女子師範学校		1									1
高女高等科・専攻科・補習科等		22	35	14	13	7	13	2	11	12	11	140
各種学校等	自由学園	1							1			2
	不明				1			2				3
企業等の学校	常盤裁縫塾				1					3		4
その他・不明	不明		2		2	1			1			6
	計	27	42	14	23	15	13	9	16	18	13	190

具体的な進学先の学校名称は不明であるが、医学専門学校と思われる記述がみられた。「東京とても遊ぶ所があるんです（中略）遊び屋でも試験となると真面目です。誰しも藪医者にはなりたくありませんからね。此の頃では私たちは主に実習です。前は患者をもらつても上つちやつてどうしたら良いか分らなかつたんです」[52]のような記述を確認できた。

大阪府の帝国女子薬学専門学校とみられる記述が2例みられた。「私事尚引続いて学校生活を送つて居ます。（中略）今はすつかり馴れて大阪弁もとてもうまくなり、薬の香も大分浸み込んで参りました。薬剤師の卵とでも云ふ所で御座います」[53]と、名古屋を後にして帝国女子薬学専門学校へ進学したことが分かる。やはり、県第一高女から一定数の進学者があったようで、「此の薬専におきましては愛知第

一高女の評判はとてもよう御座います」との記述がみられる。

東京府の帝国女子医学薬学専門学校へ進学したと思われる記述では、「東京大森の此の薬専に相変らずの学生々活を続けて居ります（中略）今年の夏休みは（中略）名古屋医大病院の薬局に見学生として二週間ばかり通ひました」[54] とあった。「たくさんの薬剤師にまじつて忙しく然し愉快に」過ごしている様子を綴っており、「卒業後、名古屋へ帰れば、皆様にお目にかゝる機会も多くなると思へば、それが何より嬉しうございます」[55] と、卒業後は名古屋へ帰る予定であった。

【図表 12】東京府における専門学校の学費

学校名	修業年限	学費年額
東京女子医学専門学校	本科 4 年、予科 1 年、研究科 1 年	150 円（卒業受験料 50 円）
帝国女子医学専門学校	本科 4 年、予科 1 年	180 円
東京女子歯科医学専門学校	4 年	100 円
東京女子専門学校	3 年	77 円
東京女子大学	高等学部 3 年、大学部 2 年、本科 4 年	高等学部 77 円、大学部 88 円

〔東京市役所編『東都学校案内』（三省堂、大正 15 年、小川利夫・寺崎昌男監修『近代日本青年期教育叢書　第Ⅴ期・進学案内　第14巻』日本図書センター、平成 4 年復刻発行）、75-88 頁をもとに作成。〕

大正 15 年の『東都学校案内』によると、【図表 12】の通り、医専や歯科医専においては、他の専門学校に比べ学費は高額であった。東京女子医学専門学校の学費は年額 150 円（卒業受験料 50 円）、東京歯科医学専門学校が年額 100 円、実習料 50 円、帝国女子医学専門学校が年額 180 円、東京女子歯科医学専門学校が年額 100 円であった。いずれの修業年限も本科 4 年である。これに比べ、東京女子専門学校や東京女子大学高等学部では修業年限 3 年で年額 77 円である。医専、歯科医専の 2 分の 1 前後であった [56]。

次に女子高等師範学校である。女子高等師範学校へ進んだ者は 7 例確認できた。「東京女子高等師範理科に御在学中」[57]、「（前略）と御一緒に、女高師で御勉強中でございます。よく日曜等には採集にお出かけになつてあちらに御出になつてはじめての、武蔵野の秋にお酔ひになつてゐると承はりました」[58] など、東京女子高等師範学校への進学を 4 例確認できた。東京女子高等師範学校へ進んだ卒業生のその後について、大正 15 年発行の『あゆち』中「会員の動静」に、「（前略、大正 10・11 年本科卒業の 2 名）の両姉は本年三月東京女高師を卒業せられ愛知県女子師範学校と石川県立金沢高第二等女学校（ママ、「第二高等女学校」カー筆者註）とに夫々奉職せられました」[59] との記述がある。

また、「奈良の女高師に御勉学中でいらつしやいます」[60] のように奈良女子高等師範学校への進学も 3 例確認した。

東京か奈良か不明であるが、この他に、女子高等師範学校へ進学し、後に県内で高等女学校教員として勤めたと思われる記述がみられた。「本年春高師卒業になりまして直ぐ岡崎の女学校に御奉職」[61] したケース、「昨年女高師を御卒業になり今年からは（中略、2 名）さんと共に市立第三高女に御奉職」[62] したケースがみられた。

以上から、女子高等師範学校で学び、その後は中等学校教員となったという進路をみてとることができる。

なお、女高師への入学については、「激烈な競争試験」[63] を通過せねばならず、合格者が顕彰された。以下に示したのは昭和 3 年の『あゆち』に掲載された「女子高等師範学校入学者」についての記述である。

◎女子高等師範学校入学者

昨年十二月施行せられました東京、奈良両女子高等師範学校の入学試験合格者が発表せられました。両校の受験者数、合格者数及び其の割合は左の通りであります。

	受験者	合格者	割合
東京女高師	八四三	一〇九	約八人ニツキ一人
奈良女高師	六四二	七五	約九人ニツキ一人

而して本校卒業生及び在校生で合格しました方は左の五名であります。

東京女高師	文科	（中略）	（在校生）
	同	（中略）	（同　　）
	理科	（中略）	（同　　）
奈良女高師	理科	（中略）	（在校生）
	家庭科	（中略）	（卒業生）

激烈な競争試験に多数合格しました事は誠に喜ばしい次第であります。

当時、女子高等師範学校への入学は狭き門であったことが分かる。この記述に従うと、東京女子高等師範学校の競争率は7.7倍、奈良女子高等師範学校のそれは8.6倍であったということになる。

名古屋市内の女子高等教育機関として、金城女子専門学校、椙山女子専門学校が設置されていた。金城女子専門学校（金城女学校専門学部）が昭和2（1927）年に設置されたが、本稿で確認した『あゆち』誌上では、【図表11】の通り2例であった。「早速乍ら私事昨春金城女専校卒業後直ぐ大阪近くに新しい家庭をもちまして、今年は四月に早や一女の母」[64] となったケース、「卒業後三年の金城女専時代!!」を経て、「文部省中等教員免許状並びに小学校本科専科正教員免許状を得た」が、その後、「名毎婦人記者募集に飛入り、幸運にもパスして今はジヤーナリストとして名古屋中をかけまはつてゐます」[65] という例もみられた。また、椙山女子専門学校（椙山女子高等専門学校）が昭和4（1929）年に設置認可されたが、本稿で検討した史料をみる限り、皆無であった。

珍しいケースとして、昭和2年専攻科卒業生による、「東北帝国大学法文学部の文科を卒様（ママ）しましてから、すぐに先生の御言葉に従つて大学附属の図書館に二十人許りの男の人々と共に勤務して居ります」[66] という記述がある。東北帝国大学では大正2（1913）年以降、女性の受験を認めており、女性初の学士を輩出した[67]。「東北帝国大学法文学部規程」の第2条には、「専門学校、高等師範学校、女子高等師範学校其ノ他之ト同等程度以上ノ諸学校ノ卒業者中本学部ニ於テ適当ノ学力アリト認メタル者ニシテ検定試験ニ合格シタル者」[68] の入学を認めていたとあるので、女子高等師範学校などを経て東北帝国大学へ入学した可能性がある。

②補習科、高等科、専攻科など

次に、補習科、高等科や専攻科などの附設課程へ進んだケースである。その進路の一つは、これらへ進学した後、裁縫や稽古事に従事するというものである。大正13年に本科を卒業し、その後専攻科へ進んだ者の一人は、「母校専攻科を途中でお止めになりまして只今では真面目なお裁縫遊芸のお稽古と読書」[69] 等に専念した。また、会社等へ勤めたケースとしては、補習科へ進み1年間学び、その後、「愈々社会へ出て会社に勤務」し、「毎日タイプを打つたり事務を執つたり」[70] と、タイプライターとして某会社に勤務したとの記述がみられた。あるいは、2年間「上に学」び、「すぐに結婚」[71] した例も確認できた。

昭和16年以降の記述をみると、高等科を終えた後、教職に就いた例がみられた。例えば、「私事高等科を出ましてよりしばらく国民学校に奉職し小さい御方達の相手」[72]、「卒業後教職にお就きになり、第二の国民をあづかつて御元気に其の重い使命を立派になさつてお出」[73] との記述である。後者については、「御家庭では、御養子をお迎へになり、女のお子様の母として、御養育にと、内外に御国の為おつくしになつてゐられる御多忙な日常」[74] を送る者もみられた。小学校（国民学校）への就職者については次に述べる。

(2) 就職

①学校教員

【図表 13】通信欄から判明した勤務先

進路分類	卒業年西暦										計
	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1933	1934	1935	
中等学校等教員等		1	2	2	1						6
小学校教員	1	4	1						2		8
その他教育従事	1	2	1		1			1		1	7
その他公務等					2	2	2	5	2		13
会社等		1		3	2			2	2	2	12
その他・不明			1		1			1	2		5
計	2	8	5	5	7	2	2	9	8	3	51

【図表 13】は通信欄記載内容から勤務先が判明した者の人数である。まず、高等女学校教員となった例についてみる。本稿で確認できたものに限るが、少なくとも２例は名古屋市内の高等女学校であった。母校である県第一高女の教員となったものと思われる大正 14 年専攻科（英語科）卒業生は、「一部の職業婦人の為の夜学開設」をして「その英語教師」になることを夢見ていたが、「今は母校の職員室におさまりかへつて、兎も角も先生といふ名のもとにそれらしい生活をしてゐる」[75] と綴っている。名古屋市内の皇華高等女学校で教員として勤めた例としては、大正 15 年に専攻科（国語科）を終え、「御卒業後間も無く市内皇華女学校へお勤め」[76] との記述を確認できた。

同じく専攻科（英語科）を卒業し公立高等女学校へ勤めた者としては、この他に、「九月の半ば頃より一宮高等女学校へ御奉職」[77] したケースがみられた。同校へ勤務した卒業生は他にもあり、「一年上の（中略）とは御一緒」との記述あった。

東京府の私立高等女学校へ勤めたケースをみる。私立の小石川高等女学校で「理科」の教員として勤めていたのであろうか、昭和３年の卒業生について「目出たく学校を御卒業遊ばして、只今は小石川の方の女学校の理科の先生をしていらつしやる」[78] との記述がみられた。また、昭和２年に専攻科を終え、「昨年四月より母校淑徳高等女学校に御勤め」[79] などの記述がみられた。

以上のように、中等学校教員となった者の多くは専攻科へ進んでいた。

小学校教員とみられる卒業生の記述をみてみよう。大正 13 年に本科を卒業した卒業生について、昭和２年７月発行の『あゆち』に、「大成小学校（名古屋）で可愛いゝ三年の方々から『私の先生、大切の先生』として、なつかしまれ慕はれていらつしやいます」[80] と記述されている。卒業後３年後ということになり、卒業直後かどうかは不明である。また同じく、大正 14 年の本科卒業生について昭和２年７月発行の『あゆち』に、「上記の皆様は夫々小学校に御奉職なさいまして、児童教育の為に色々御奮闘なさつて下さいます」[81] として、以下の８名の氏名と勤務先が記されている。多くは名古屋市内の小学校である [82]。

（Ｉ・Ｔ）様　森後小学校
（Ｉ・Ｆ）様　俵小学校
（Ｓ・Ｋ）様　西枇杷島小学校
（Ｓ・Ｔ）様　榎小学校
（Ｆ・Ａ）様　一色小学校
（Ｍ・Ｆ）様　御器所小学校
（Ｙ・Ａ）様　瑞穂小学校
（Ｋ・Ｓ）様　一色小学校

彼女らの消息について、大正 15 年６月発行の『あゆち』第 20 号に、以下の記述があり、同年の３月に師範学校を卒業したということが分かる。

大正十四年本科卒業（Ｙ・Ａ）、（Ｉ・Ｆ）、（Ｉ・Ｔ）、（Ａ・Ｍ）、（Ｓ・Ｈ）、（Ｂ・Ｈ）、（Ａ・Ｔ）、

（S・K）、（F・A）、（S・T）、（M・F）の諸姉は本年三月本県女子師範学校を卒業せられ、（A・M）、（B・H）、（A・T）の三姉は更に同校専攻科に入学、他の諸姉は市内小学校に奉職せられました。[83]

つまり下線部の7名は、大正14年に県第一高女の本科を卒業した後、愛知県女子師範学校へ進み、翌15年3月に同校を卒業、その後、愛知県内、名古屋市内の各小学校に配属された、という進路をたどったということである。

この他、昭和9年に高等科を卒業し教員となった者は、昭和11年3月発行の『あゆち』誌上に、「只今の生活に入つて半年余り」[84]の様子を記している。「始めの間はたゞ気分ばかり緊張して壇上に立ちましても落ちつきなく、今何を話してゐるのか、教師自ら不明瞭にて、一時間おしへましても何等の収穫なく」、「みぢめな有様」であったこと、しかし、「只今は心のゆとりも出来、次に何を話すべきか、を考へる必要もなく」、授業も軌道に乗ったようである。この寄稿の後、この卒業生について、「波も静かな知多の海辺名も美しき小鈴ヶ谷村の小学校に奉職（中略）熱心な先生でいらつしやいます」と紹介されている。

幼稚園教員となった卒業生に関しては、「再び生れ故郷の東京へお帰りになつて（中略）上京なされて以来保育の方を御研究になり、今春から幼稚園にお出」との記述があった。この卒業生は「皆様も一二年間是非此の修業をなすつてから、島田にお結ひ下さいますやうに」[85]とのメッセージを記しており、結婚前の「修業」として幼稚園教員を捉えていたことをうかがうことができる[86]。

大正15年に専攻科を卒業した者は、「御卒業後間もなく市立第一幼稚園へおつとめになつていらつしやいますとか、可愛らしいお子さん方をお相手に、毎日おもしろくお暮しの事と存じて居ります」[87]と、公立幼稚園に勤めている。

②その他公務等

次にその他公務等を務めたケースについてである。昭和11年3月発行の『あゆち』に4名の卒業生氏名が示され、「私達は卒業後間もなく名古屋鉄道局に勤務」[88]という記述がみられた。「学生気分が抜けきらずに、毎日々々朗らかに愉快に勤めて居ります」と、同じ年の卒業生が複数名勤務していたことが分かる。「非常に旅行に恵まれて居りますので、お休みを利用いたしましては時候に応じて海に、山に、或はハイキングに、スキーに、と彼方此方へ旅行いたして居ります」[89]と、充実した様子を綴っている。鉄道局にはこの他にも、「私も御蔭様にて相変らず元気にて職業婦人の一人に御仲間入り（中略）来年の三月が参りますと丸五ヶ年鉄道局の方に御厄介になります」[90]、「卒業致しまして以来、名鉄局に勤務致して居ります」[91]などの記述がみられた。後者については、「幸ひ多くの同窓の方に恵まれまして、楽しく朗かに仕事にいそしんで居ります」とあり、一定数の県第一高女卒業生が勤めていたものと考えられる。

昭和9年の本科卒業生は、「御卒業後、県庁にタイピストとしてお勤め」[92]、昭和8年の本科卒業生は、以下のように「看護婦となりて昨年の春現在の医院」に勤めた。彼女は、次のように、「就職難の渦中」でもがいた経験を経ている。

（前略）ブラツクラインの誇ある制服を脱いで二年半。（中略）白衣を着けて医院に働く様になつてから一年半になる。（中略）小児科の医院の明け暮れに、最も強く心を打つものは「母性愛」だ。（中略）思へば母校卒業後否もつと前在学中から、只管職業婦人を望み店員でも事務員でもと縋り附く綱は次々と断たれて、就職難の渦中にさまよふ暗黒の一年。如何なる神の引合はせか、思ひも寄らぬ看護婦となりて昨年の春現在の医院へ参りました。（後略）[93]

③会社等

会社等に勤務した例としては、次にみるような「仕立屋」や「洋装店」といった、裁縫の技術を活かした職に就いていた。大正 14 年に本科を卒業して「直ちに仕立屋に御通ひ」[94]、昭和 2 年に同じく本科を卒業し、「御卒業後は楽しく仕立屋へおいで遊ばした」[95] 例がみられた。後者については、その後、「最近はおやさしいお母様とお二人が田舎の静かなお家で楽しく編物をあそばしていらつしやいます由」と付け加えられている。昭和 8 年本科卒業生の一人は、「洋裁を廣田先生に師事致し、只今羊屋洋装店に勤め、僅かに研究を続け」[96] ていると記している。

あるいは「商事会社」などの記述がみられた。昭和 10 年に本科を卒業し「七年の歳月」を経た後の記述である。「卒業と同時にさる商事会社に就職致しまして爾来七年ペンと算盤に単調なあけくれを過して居」ると、近況報告をしている。続けて、就職間もない「当時は母校の先輩もまだ大部いらつしやるし尊敬する二、三の方々もゐましたのでお会ひする度に何か母校に話の触れない事は有りませんでした（後略）」[97] と同窓に恵まれていたことを懐かしみつつ、「七年を顧る時、そゞろ自分の姿にあり／＼寂漠の念」を抱くようになったと述べている。

日本銀行名古屋支店等に就職した卒業生の記述を 3 例確認した。昭和 7 年発行の『あゆち』では、昭和 3 年本科卒業生について、「御卒業引続き日本銀行へ御勤めの御様子でございます」[98] と紹介されている。昭和 11 年発行の『あゆち』では、昭和 9 年本科卒業生が「私は卒業してすぐ、（中略）と共に、日本銀行に入り、二人とも今日迄無事に勤務致して居ります」[99] と、近況報告をしている。昭和 10 年本科卒業生も昭和 16 年の『あゆち』に、「卒業後ずつと日本銀行名古屋支店にお勤めでいらつしやいます。時折栄町等でお元気なお姿お見掛けする事がございます」[100] と綴っており、複数名が就職していることが分かる。

（3）裁縫等稽古・家事

【図表 14】は通信欄の記載内容から判断し、裁縫等の稽古・家事に従事した者を未婚、結婚、不明に分けて集計したものである。【図表 10】に示した通り、進路が判明した者のうち、半数近くは「裁縫等稽古・家事」に分類できた。

親元で裁縫等の稽古、家事の手伝いなどに従事した卒業生の記述をみる。「日々裁縫修業いたし候」[101]、「ひたすら母の手づ(ママ)だひいたし余暇には裁縫と琴とをいたし候」[102]、「お家でお裁縫のかたはら、茶の湯生花をはじめお琴のお稽古」[103] など、裁縫や琴、生花、茶などを身に付けていた。また、あるいは、「講習会」に出かけ、修養に努めていた。「母の許で一日の大部分は御針をなし、朝夕の食事の事も及ばずながら手伝」いながら、「折々は近しいお友達などお誘ひいたし、手芸に関する講習会又はお料理に関した講習会など」[104] に参加した様子を伺うことができる。

しかし一方で、そのような「家事裁縫」などに対する否定的な見方も見受けられた。例えば、昭和 3 年の本科卒業生は、昭和 7 年発行の『あゆち』に、「（前略）毎日家事裁縫などいたして居ります。皆様は学窓に、実社会に有意義な生活をなすつていらつしやいますのに、私独り何だかとり残されて行く様な気がいたします」[105] と述べている。

昭和 5 年に高等科を卒業した者は、「今ではすつかり家庭生活が板についてしまつて、外に出て働いていらつしやるお友達に会ふとかなり気分の隔りを感じ、羨しいやうな気が致します」と、「職業婦人」に対する羨望を抱いている。これに続く「家の手伝、裁縫、編物――そんな事で一日がくれてしまひます。幼い妹達の生活の中に混つて子供

【図表 14】家事・裁縫等稽古事等

進路分類	卒業年西暦										計
	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1933	1934	1935	
家事・裁縫等稽古事	10	16	6	37	11	1	9	5	26	3	124
結婚	3	9	1	10	37	3	9	12	4	25	113
不明	2	1	3	5	1		2	2	3	3	22
計	15	26	10	52	49	4	20	19	33	31	259

とほがらかに多くの時間を過して居ります」[106] との記述からして、未婚であるものと思われる。

また、昭和９年の本科卒業生は、「私、毎日々々をお稽古に家事の手伝ひにと、本当に平凡な一日を送つて居ります。こんなつもりではなかつた、と時々思つてもみますが」[107] と、他に為したいことがあったのか、後悔の念がよぎる日常を綴っている。

『あゆち』掲載時点ですでに結婚している卒業生の記述をみてみよう。「卒業後勤務先を求めまして、今尚引き続き勤務して居りますし、昨年七月に男児の母となりました」[108]、などの記述にみられるように、卒業後間もなくして、結婚したと考えられる記述が多く見られた。結婚すると、生活の拠点も配偶者の転勤とともに移動した。以下に示したのは昭和８年本科卒業生の記述である。

> 母校の窓を離れましてから早二年半程夢の間に打過ぎて了ひました。（中略）卒業して直ぐこんな遠くに参りました（中略）まだよく馴れません主婦の仕事は何かと忙しく、つい筆無精許り致して御無沙汰勝ちになつて居りまして、本当に申訳御座いません。こちらは御料地の牧場内で御座ゐますので、見渡す限りの落葉松の林と広い野原――その一隅にさゝやかな官舎生活をして居ります。（中略）
> 又何年後にか名古屋の支局にでも転任致しまして、再び母校の門をくゞつて、皆様ともお目にかゝれ、昔の楽しき学窓生活の思ひ出話に花を咲かせる時が一日も早く訪れて参りますことを祈つて居ります。[109]

彼女は卒業後、北海道の「帝室林野局出張所官舎」[110] にあった。配偶者が帝室林野局に勤めていたものと考えられる。国家事務に従事する者と結婚すれば、全国にわたり転勤することも多く、県外で過ごすこのようなケースもあった。『県第一高等女学校史』でも触れられているが、『あゆち』第16号に大正11（1922）年時点の「結婚に関する調査報告」[111] が掲載されている。【図表15】は「夫の職業別」人員である。これをみると、商工業従事者が半数近くを占めており、上記のような「官公吏」は１割ほどであった。先行研究で言及されている教育の「地位表示機能」「地位形成機能」という観点から興味深い調査である[112]。

【図表15】県第一高女卒業生における夫の職業

夫の職業別（調査人員七二一名）		
職業	人員	比率
農業	25	3.5%
工業	85	11.8%
商業	235	32.6%
軍人	54	7.5%
官公吏	78	10.8%
宗教	21	2.9%
教育	77	10.7%
医務	86	11.9%
記者　著述者	1	0.1%
其他の自由業	27	3.7%
収入によるもの	32	4.4%
計	721	100.0%

（『あゆち』第16号、大正11年12月、192頁より。）

※縦書きを横書きに、漢数字を算用数字に改めた。
※「比率」「計」は筆者が付記した。

（4）その他

卒業後、長く年数が経過しているため（大正２年本科卒業者であり、８年経過している）、上の図表には算入していないが、「二人子持ちで（中略）母が大へん丈夫ですから、それに子供を托して（中略）学校で大勢の子供に接して」[113] いるという次のような姿がみられた。

> （前略）二人子持ちで職を持つて居てはさぞ、えらいでせうと言つて下さる方がありますが、母が大へん丈夫ですから、それに子供を托して出れば誠に安心で私が守りするよりはどれだけ安全だか知れませぬ。（中略）実は出産前に私の奉職するのを止めやうかとも思ひましたが、毎年夏一ヶ月余の休みにさへ終りはきつと病気になる様な身体で年が年中どうしても不規則になり易い家庭生活のみ続けては却つて私の為によくないだらうと遂に出る事に致しましたが、学校は家の直近くですし（中略）子供の病気の時なども親切に言つて下さいますので、ほんたうに嬉しうござい

ます。（中略）学校で大勢の子供に接して見ますと実に十人十色で頑是ない児童を通じて見る其の両親や周囲の有様が余りに明かなのに驚かされます。（後略）[114]

やがて大東亜戦争に突入すると、卒業後の生活は変化する。先に述べた、「第二の国民をあづかつて」いた卒業生もそうだが、昭和16年12月発行の『あゆち』には、「昼はベルトの唸る騒音の中に工場の事務員として働き、夜は母として子供の養育に」[115] 携わる姿がみられた。また、同号には以下のように、「幾多の健げな未亡人」による記述がみられるようになった。

（前略）私も去年の春主人が亡くなりまして其後実家の方へ帰りまして又元の娘時代の如き生活を致して居ります。
此の度の聖戦におきまして幾多の健げな未亡人がいらつしやいますのに私等がぼんやりその日を暮しましては誠に申訳なく毎日の日々を意義有るものに暮したいと思つて居ります。私ももう一週間も致しましたら妹達の勤労奉仕が始まりますので名古屋の方へ帰ります。（後略）[116]

その後、昭和19年12月に東南海地震、翌20年1月には三河地震が起きた。また空襲の本格化も加わり、名古屋は相次ぐ災禍に見舞われた[117]。県第一高女も例外ではなく、昭和20年3月12日の空襲により、武平町校舎は焼失した[118]。

おわりに

以上の分析から、県第一高女における卒業生の進路にみられる特色について述べる。

卒業後の進路として大勢を占めたのは、他の例に漏れず、家庭において、裁縫等の習い事に従事した者、結婚した者であった。ただし、昭和期の「会員消息」の記述をみると、「職業婦人」を目の当たりにし、「お稽古に家事の手伝ひ」にいそしむことに対して懐疑的な言及もみられ、「モダン職業婦人」[119] が理想であったことが分かる。

進学した者については、補習科や専攻科、高等科などの附設課程へ進んだケースが最も多かった。専門学校へ進学したケースについては、学費の高い東京の医専や薬専、あるいは「一流家庭の子女」をターゲットにした桜菊女子学園のような各種学校で学んだ。同市内に金城女子専門学校や椙山女子専門学校が設置されていてもこれらの学校へ進学したケースは少数であった[120]。所得等を精査する必要があるが、名古屋市における高等女学校入学者の親の職業から考えると、他府県で寄宿舎に住まわせ、医専や薬専に進学させるに足る経済力が他の地域に比べ高かったと予想される。

他の高等女学校同様、勤務先が記述されていた例をみると、中等学校教員、小学校教員、幼稚園教員など教育従事者が一定数あった。しかし、「日本銀行名古屋支店」や、名古屋鉄道局、県庁など、都市部特有の職に就いたケースが、本稿で検討した対象の中では最多を占めていた。

本稿では直接的には取り扱わなかったが、愛知県および名古屋市における私立女子高等女学校について最後に言及しておく。これまでの研究で、名古屋市においては、私立学校も女子中等教育の大きな一翼を担ったことが分かっている[121]。拙稿で示した岐阜県や長野県に比べ、冒頭に述べた通り、名古屋市においては愛知淑徳、椙山、皇華、名古屋、中京、桜花など私立高等女学校が複数設置された。これらの存在が、いわゆる「良家」の子弟として求められる教養を身につけさせるという機能を担っていたことはこれまでにも指摘されているところである。また、名古屋市においては勿論、「中部日本」においても初の女子高等教育機関は金城女子専門学校であった[122]。こうした私学の存在や役割は名古屋市あるいは愛知県、ひいては中部地方における、他地域にはみられない女子教育の特色であったと考える。

註

1）烏田直哉「岐阜県大垣高等女学校における卒業生の進路―『同級消息』欄の記述内容を中心に―」（東海学園大学スポーツ健康科学部教育研究紀要委員会編『東海学園大学教育研究紀要』第6号、2021年、40-55頁）、同「長野県長野高等女学校における卒業生の進路」（同第7号、2022年、28-42頁）、同「長野県松本高等女学校における卒業生の進路」（同第8号、2023年、14-26頁）。以下、史料等を引用する際は、人名などを除き、旧字体を新字体に改めた。また、発行年の和暦・西暦については奥付表記のままとした。

2）昭和10年の各市町村の人口からみた「最大」である。内閣統計局編『昭和十年　国勢調査報告　第一巻　全国編』、昭和14年、4-33頁参照。

3）深谷昌志『増補　良妻賢母主義の教育』（黎明書房、昭和56年）では、主に明治期の女子教育に焦点を当て、それを貫く原理に「良妻賢母」が存在したこと、特に中等教育において強調されたことを指摘した。女子中等教育機関卒業後の進路に関わる研究として、天野郁夫・浜名篤・吉田文・広田照幸「戦前期中等教育における教養と学歴―篠山高等女学校を事例として―」（『東京大学教育学部紀要』第29巻、1989年、53-80頁）、井上好人「明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能―石川県立第一高女同窓会誌の『会員消息』記事の分析から―」（『教育社会学研究』第83集、2008年、149-168頁）、土田陽子「地方における高学歴女性のライフコース選択―県立和歌山高等女学校の事例から―」（『紀州経済史文化史研究所紀要　第37号』和歌山大学紀州経済史文化史研究所、2016年、1-16頁）などが挙げられる。また、水野真知子『高等女学校の研究（上）（下）―女子教育改革史の視座から―　野間教育研究所紀要　第48集』（野間教育研究所、2009年）では、高等女学校を中心とした女子教育の史的展開を叙述する中で、1910年代後半の変化について指摘している。この他、高等女学校に限らず、愛知県の女子教育全般の「通史篇」「人物篇」を、江戸時代から昭和後期にいたるまで叙述した結城陸郎『愛知県近代女子教育史』（愛知県郷土資料刊行会、平成12年）も参照した。

4）県第一高女同窓会報である『あゆち』については、名古屋市立鶴舞中央図書館、蓬左文庫所蔵のものを用いた。

5）ここでいう「名古屋市における」というのは、設置時点で「名古屋市」であったものとする。市域拡大により、名古屋市に編入されたもの、あるいは移転により名古屋市内になったものは含まない。

6）愛知県教育委員会編『復刻版　愛知県教育史　第三巻』第一法規出版、昭和57年、759頁参照。また、愛知県第一高等女学校史編集委員会編『愛知県第一高等女学校史』愛知県第一高等女学校史刊行会、昭和63年、7-8頁参照。以下、後者を引用・参照する際は、「『県第一高等女学校史』、7-8頁参照。」のように略記する。なお、眞有澄香は、高等女学校令公布後、県立高等女学校設置が遅れた理由として、「国語読本」などにみられる教育内容から「女子教育不要論に固執」していたためであるとしている（眞有澄香「『読本』と女子教育―愛知県第一高等女学校を事例として―」同朋大学日本文学会・人間文化学会・人文学会編『同朋文化　第六号（通巻三十九号）』、2011年、1-22頁）。

7）『県第一高等女学校史』、8頁参照。名古屋教育史編集委員会編『名古屋教育史Ⅰ　近代教育の成立と展開〈明治期～大正中期〉』（名古屋市教育委員会、平成25年）によると、明治34年に愛知県が同校の県立移管を打診したとの記述もある（311頁参照）。

8）『県第一高等女学校史』、15頁参照。

9）『県第一高等女学校史』、37頁参照。

10）『県第一高等女学校史』、39頁参照。

11）『県第一高等女学校史』、40 頁参照。
12）『県第一高等女学校史』、81 頁参照。
13）『県第一高等女学校史』、39 頁参照。
14）『県第一高等女学校史』、39 頁。
15）『県第一高等女学校史』、81 頁参照。
16）『県第一高等女学校史』、123 頁参照。
17）『県第一高等女学校史』、181 頁参照。
18）『県第一高等女学校史』、182 頁。昭和 18(1943) 年、当時の「名古屋市昭和区弥富町」（「文部省告示第十一号」『官報』第 4804 号、昭和 18 年 1 月 20 日、292 頁）に名古屋市立女子高等医学専門学校が設置された。
19）『県第一高等女学校史』、81 頁参照。専攻科廃止について、『アユチ』第 19 号（大正 14 年 11 月）の「編輯後記」で次の様に触れている。

　声明を裏切るといふことは恥かしいことだ。雑誌アユチは一昨年の四月に月刊雑誌として永続するといつて置いたものが、本年になつて中絶するの悲運に陥つた。然しこれはただ何といふことなしに廃したのでなくて、御承知の通り専攻科廃止問題勃発の為めである。

「専攻科廃止問題」とは、大正 14 年 3 月に 4 月から専攻科生徒の募集を取りやめることになったことを指す（『県第一高等女学校史』、118 頁参照）。大正 11 年 4 月の学則改正により、国語部と英語部で構成されていた専攻科であったが、大正 13 年 3 月にさらに改正され、高等科が設置されることとなった。それにともない専攻科国語部は廃止となり、「英語部だけが、高等科と名称が変わり」（同、119 頁）残ったのである。専攻科 3 年を終えると中等学校教員の資格を得られると校長から聞いたばかりのことで、この時の卒業生は「割り切れない感じで、残念でした」（同、119 頁）と回顧している。
20）前掲、水野真知子『高等女学校の研究（上）』、417 頁参照。
21）『県第一高等女学校史』、81 頁参照。
22）名古屋教育史編集委員会編『名古屋教育史Ⅱ　教育の拡充と変容〈大正後期～戦前期〉』名古屋市教育委員会、平成 26 年、147 頁参照。
23）「文部省告示第二百二号」『官報』第 1115 号、昭和 5 年 9 月 15 日、380 頁参照。
24）『県第一高等女学校史』、77 頁および文部省普通学務局編『大正十五年十月一日現在　全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査』、昭和 2 年、42 頁参照。学校所在地は文部大臣官房文書課編『日本帝国文部省第五十一年報自大正元年至大正十三年四月三日下巻』、昭和 2 年、48-49 頁によった。
25）「岡本桜」『講談社日本人名大辞典』講談社、2001 年、410 頁参照。大阪瓦斯から名古屋瓦斯にうつり、大正 6 年に同社社長となっている。
26）野依秀市『岡本櫻傳』實業之世界社、昭和 13 年、534 頁。
27）前掲、『岡本櫻傳』、536 頁参照。
28）専門学校令に基づく「金城女学校専門学部」として設置（「文部省告示第九十一号」『官報』第 56 号、昭和 2 年 3 月 10 日、250 頁）された後、「金城女子専門学校」と改称した（「文部省告示第二百八十二号」『官報』第 208 号、昭和 2 年 9 月 6 日、129 頁）。
29）文部省専門学務局「金城女子専門学校学則中変更認可」、昭和 12 年 2 月 19 日（国立公文書館デジタルアーカイブ）。これによると、国文科、英文科、家政科、家庭科において、第 1･2 学期が 32 円、第 3 学期が 24 円、計 88 円である。
30）名古屋市立第一高等女学校松操会編『昭和十三年十二月　会員名簿』、昭和 13 年 12 月、188 頁参照（鶴舞中央図書館蔵）。

31）名古屋市立第一高等女学校編『創立四十周年記念　学校概覧』、昭和 11 年 10 月、129 頁参照（鶴舞中央図書館蔵）。

32）『県第一高等女学校史』、180 頁。

33）市一・菊里創立百周年記念誌編集委員会編『創立百周年記念誌』、平成 8 年カ、31 頁。

34）大野一英『ファースト・ガールズ・スクール　旧制名古屋市立第一高等女学校〈外伝〉』中日出版社、昭和 61 年、216 頁。また、この卒業生は、「『愛知百科事典』には『市一はおきゃん』と書いてありますよ。ついでに言いますと、県一はまじめ、地味でしょうか。」（同書、214 頁）とも述べている。確かに市一高女について、「『オキャンな市一高女』と親しまれていた」（「名古屋市立第一高等女学校」中部新聞社開発局編『愛知百科事典』中日新聞本社、昭和 52 年、609-610 頁）との記述がある。

35）国立教育研究所編『日本近代教育百年史　4　学校教育(2)』教育研究振興会、1974 年、1118 頁。

36）前掲、『日本近代教育百年史　4　学校教育(2)』、1120 頁。

37）前掲、天野郁夫・浜名篤・吉田文・広田照之「戦前期中等教育における教養と学歴」、72 頁。

38）愛知県立高等女学校編『自明治三十六年三月至明治三十九年三月愛知県立高等女学校一覧』、明治 39 年 7 月、81 頁。

39）大正 7 年の『愛知県統計書』には「管内学事ノ状況」として、「入学者父兄職業別人員」が掲載されている。「農」「工」「商」「官公吏」「教員」「医師薬剤師」「神職僧侶」「銀行会社員」「其ノ他」と分類されている（愛知県編『大正七年愛知県統計書』、大正 11 年 3 月、242-243 頁）。大正 8 年からは 4 編に分かれ、同書「第二編」を「教育」としてある。同じく「管内学事ノ状況」として、「入学者父兄ノ職業別人員」が掲載されており、分類も前年のものと同一である（愛知県編『大正八年愛知県統計書　第二編（教育）』、大正 12 年 1 月、143-144 頁）。大正 9 年、同 10 年の『愛知県統計書』では、同じく「第二編」を「教育」としてあり、「管内学事ノ状況」に「入学者父兄職業別」が掲載されているが、農業については「農耕、畜産、蚕業」、工業については「窯業」「金属工業」「機械器具製造業」「繊維工業」などと細分化されている〔愛知県編『大正九年愛知県統計書　第二編（教育）』（大正 12 年 12 月、9-10 頁）、愛知県編『大正十年愛知県統計書　第二編（教育）』（大正 13 年、8-9 頁）〕。大正 11 年では、同じく「管内学事ノ状況」として、「入学者父兄ノ職業別」が掲載されているが、分類が変わり、「農業」「水産業」「鉱業」「工業」「商業」「交通業」「公務自由業」「其他ノ有業者」「家事使用人」「無職業」というように簡略化されている（愛知県編『大正十一年愛知県統計書　第二編（教育）』、大正 15 年、9-10 頁）。大正 12 年からは「入学者父兄」の職業は記載されなくなった。

40）「和楽会」については、「八、和楽会の沿革」『あゆち』第 5 号、明治 43 年 12 月、13-14 頁参照。なお、「卒業生に対する施設」（同、122-123 頁）として、「母校と卒業生との連鎖を密ならしむる為に左の施設をなす」として、「記念成績品」「記念栽樹」などとともに「和楽会」が挙げられている。この「和楽会」は「本校卒業生は必入会すべきものにして毎年春秋二季に総会を開き訓話、懇談等を催し時には名望ある人を招待して其の講話を請ひ以て本会の目的たる師恩を偲び友誼を温め相互の徳義を増進」させると説明されている。

41）愛知県第一高等女学校和楽会編『昭和十一年客員及会員名簿』、昭和 11 年 12 月。以下、本名簿を単に「『名簿』」と略記する。

42）「あゆち」の名の由来について、『県第一高等女学校史』、26 頁に記載がある。『あゆち』創刊号の記載について述べられており、次のように引用されている（傍点は記述のまま）。

校友会誌をあゆちと申し候ふは、会長の命名にて候、愛知の古名あゆちに候、出所は万葉集に

年魚市潟塩干家良思知多の浦爾朝榜舟毛奥爾依所見

とあり候。年魚市はあゆちに候あゆち後にあいちとなりしものに候。

43）愛知県第一高等女学校和楽会編『あゆち』第 20 号、大正 15 年 6 月、251 頁。以下、同誌を引用す

る際は、「『あゆち』20 号、大正 15 年 6 月、251 頁。」のように略記する。

44）『あゆち』25 号、昭和 4 年 3 月、186 頁。

45）会員への呼びかけとして、「この次の会誌」では、「大正六年から大正十年までの消息をのせたいと存じます。幹事の方は何卒其御含みにて予め御集めおきいたゞきたうございます。（期日は一月十五日まで）」（「和楽会員の方々に」『あゆち』27 号、昭和 5 年 7 月、161 頁）との記載がある。例えば、昭和 8 年本科卒業後に高等科へ進んだと思われる某卒業生の「消息」記述にこのように記されている。

（前略）高等科を出て、やつと半年経つたばかりの今、もう「あゆち」へ消息を載せて頂ける頃なのかと、前の「あゆち」を繰つて見た程で御座います。（中略）始めは刺戟を求めて、うづ／＼してゐた家庭生活にも、今はやうやく馴れて、少しづゝでも家事のお手伝ひも落着いて出来るやうになりました。（後略）（『あゆち』33 号、昭和 11 年 3 月、114 頁）

46）「回外会員」は除外した。

47）大正 13 年本科卒Ｋ･Ｃ（愛知県第一高等女学校和楽会編『あゆち』第 22 号､昭和 2 年 7 月､208 頁）。以下、通信欄を引用する際は、「大正 13 年本科卒Ｋ・Ｔ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、208 頁。」のように略記する。また、人名を除き、旧字や変体仮名などは適宜新字に改め、姓・名をイニシャルで示した。

48）同上、209 頁。

49）大正 13 年本科卒Ｎ・Ｆ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、210 頁。

50）昭和 5 年本科卒Ｋ・Ｓ、『あゆち』31 号、昭和 8 年 12 月、225 頁。

51）『名簿』、119 頁。なお、卒業後しばらく経過している者もあり、また、通信欄の記述が確認できないものもある。【図表 11】に示していない例を挙げると、『名簿』中、「東京女子医学専門学校寄宿舎」などと記載されていた例が昭和 4 年卒業者と同 7 年卒業者に 1 例ずつ､昭和 8 年卒業者に 2 例、昭和 11 年卒業者に 2 例、計 6 例あった。いずれも本科卒業である。

52）昭和 3 年本科卒Ｍ・Ｍ、『あゆち』30 号、昭和 7 年 12 月、208 頁。

53）昭和 9 年本科卒Ｔ・Ｔ、『あゆち』33 号、昭和 11 年 3 月、127 頁。

54）昭和 8 年本科卒Ｍ・Ｈ、『あゆち』33 号、昭和 11 年 3 月、104-105 頁。

55）同上、105 頁。

56）東京市役所編『東都学校案内』三省堂、大正 15 年、75-88 頁参照（小川利夫・寺崎昌男監修『近代日本青年期教育叢書　第Ⅴ期・進学案内　第 14 巻』日本図書センター、平成 4 年復刻発行）。

57）大正 14 年本科卒Ｔ・Ｓ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、215 頁。

58）大正 14 年本科卒Ｙ・Ｋ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、215 頁。

59）「会員の動静」『あゆち』20 号、大正 15 年 6 月、243 頁。

60）大正 13 年本科卒Ｓ・Ｔ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、209 頁。

61）昭和 3 年本科卒Ｍ・Ｍ、『あゆち』30 号、昭和 7 年 12 月、208 頁。

62）昭和 10 年本科卒Ｗ・Ｈ、『あゆち』39 号、昭和 16 年 12 月、71 頁。

63）『あゆち』23 号、昭和 3 年 3 月、246 頁。

64）昭和 3 年本科卒Ｎ・Ｍ、『あゆち』30 号、昭和 7 年 12 月、203 頁。

65）昭和 5 年本科卒Ｍ・Ｆ、『あゆち』31 号、昭和 8 年 12 月、220 頁。

66）昭和 2 年専攻科卒Ｉ・Ｋ、『あゆち』30 号、昭和 7 年 12 月、216 頁。

67）東北大学女子学生入学百周年記念事業ホームページ「女子学生の歴史」参照（http://www.morihime.tohoku.ac.jp/100th/rekishi.html：令和 4 年 11 月 9 日閲覧）。『東北帝国大学一覧自昭和八年至昭和九年』（東北帝国大学、昭和 9 年）の文学士「昭和七年三月学士試験合格」者の中に、この昭和 2 年専攻科

卒業生と同姓同名の人物を確認できた（同書、447 頁）。

68）前掲、『東北帝国大学一覧自昭和八年至昭和九年』、194 頁。

69）大正 13 年本科卒Ｔ・Ｔ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、210 頁。

70）昭和 8 年本科卒Ａ・Ｓ、『あゆち』33 号、昭和 11 年 3 月、102 頁。

71）昭和 10 年本科卒Ｉ・Ｔ、『あゆち』39 号、昭和 16 年 12 月、60 頁。

72）昭和 10 年本科卒Ｔ・Ｔ、『あゆち』39 号、昭和 16 年 12 月、56 頁。

73）昭和 8 年本科卒・昭和 10 年高等科卒Ｍ・Ｔ、『あゆち』39 号、昭和 16 年 12 月、74 頁。

74）同前、昭和 8 年本科卒・昭和 10 年高等科卒Ｍ・Ｔ、『あゆち』39 号、昭和 16 年 12 月、74 頁。

75）大正 14 年専攻科（英語科）卒Ｇ・Ｓ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、223-224 頁。

76）大正 15 年専攻科（国語科）卒Ｕ・Ｍ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、224 頁。

77）大正 15 年専攻科（英語科）卒Ｋ・Ｍ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、226 頁。

78）昭和 3 年本科卒Ｓ・Ｍ、『あゆち』30 号、昭和 7 年 12 月、199 頁。

79）昭和 2 年専攻科卒Ｏ・Ｙ、『あゆち』25 号、昭和 4 年 3 月、188 頁。

80）大正 13 年本科卒Ｏ・Ａ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、208 頁。

81）大正 14 年本科卒Ｋ・Ｓ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、214 頁。下線は筆者。

82）前掲、『愛知県教育史　第三巻』、696-739 頁参照。

83）「会員の動静」『あゆち』20 号、大正 15 年 6 月、243 頁。下線は筆者が付した。

84）昭和 9 年高等科卒Ｓ・Ａ、『あゆち』33 号、昭和 11 年 3 月、140 頁。

85）大正 14 年本科卒Ｋ・Ｓ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、214 頁。

86）これに関連して、山﨑貴子は、1930 年代になると、「就業期間を学卒から結婚までに水路づける方向性は前の時期よりも強まり、職業婦人イメージは良妻賢母規範にますます包摂されていくこととなった」（同「戦前期日本の大衆婦人雑誌にみる職業婦人イメージの変容」日本教育社会学会編集委員会編『教育社会学研究』第 85 集、東洋館出版、2009 年、106 頁）と述べている。

87）大正 15 年専攻科卒Ｍ・Ｍ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、227 頁。

88）昭和 8 年本科卒Ａ・Ｍら、『あゆち』33 号、昭和 11 年 3 月、115 頁。

89）同上、116 頁。

90）昭和 3 年本科卒Ｋ・Ｋ、『あゆち』30 号、昭和 7 年 12 月、197 頁。

91）昭和 9 年本科卒Ａ・Ｍ、『あゆち』33 号、昭和 11 年 3 月、137 頁。

92）昭和 9 年本科卒Ｋ・Ｋ、『あゆち』33 号、昭和 11 年 3 月、135 頁。

93）昭和 8 年本科卒Ｍ・Ｓ、『あゆち』33 号、昭和 11 年 3 月、98-101 頁。「ブラツクラインの誇」に対して、市第一高女においては「白きラインは　わが誇り」などと表現されている。西条八十が市第一高女を賛美する「白きライン」を作詞している（市一･菊里創立百周年記念誌編集委員会編『創立百周年記念誌』、平成 8 年カ、44 頁参照）。

94）大正 14 年本科卒Ａ・Ｓ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、213 頁。

95）昭和 2 年本科卒Ｋ・Ｈ、『あゆち』25 号、昭和 4 年 3 月、180 頁。

96）昭和 8 年本科卒Ｙ・Ｍ、『あゆち』33 号、昭和 11 年 3 月、109 頁。

97）昭和 10 年本科卒Ｇ・Ｆ、『あゆち』39 号、昭和 16 年 12 月、57 頁。

98）昭和 3 年本科卒Ｔ・Ｊ、『あゆち』30 号、昭和 7 年 12 月、201 頁。

99）昭和 9 年本科卒Ｋ・Ｓ、『あゆち』33 号、昭和 11 年 3 月、132 頁。

100）昭和 10 年本科卒Ｗ・Ｙ、『あゆち』39 号、昭和 16 年 12 月、70 頁。

101）明治 41 年本科卒Ｋ・Ｙ、『あゆち』5 号、明治 43 年 12 月、73 頁。

102）明治 42 年本科卒Ｔ・Ｋ、『あゆち』5 号、明治 43 年 12 月、77 頁。

103）大正 13 年本科卒Ｗ・Ｓ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、213 頁。

104）大正 13 年本科卒Ａ･Ｃ、『あゆち』22 号、昭和 2 年 7 月、207 頁。なお、彼女は転校生だったようで、「皆様の御仲間入の出来る様になつた事が真に嬉しうございます」と付け加えている。

105）昭和 3 年本科卒Ｍ・Ａ、『あゆち』30 号、昭和 7 年 12 月、207-208 頁。

106）昭和 5 年高等科卒Ｍ・Ｓ、『あゆち』31 号、昭和 8 年 12 月、231 頁。

107）昭和 9 年本科卒Ｉ・Ｓ、『あゆち』33 号、昭和 11 年 3 月、124 頁。

108）昭和 3 年本科卒Ｋ・Ｋ『あゆち』30 号、昭和 7 年 12 月、198 頁。

109）昭和 8 年本科卒Ｓ・Ｋ、『あゆち』33 号、昭和 11 年 3 月、117-118 頁。

110）『名簿』、140 頁。

111）「五、結婚に関する調査報告」『あゆち』16 号、大正 11 年 12 月、192-195 頁。この調査について、以下のように記されている。

> 大正十一年九月既婚会員に御依頼して回答を求めました結果七百二十一名の方々より御報告を得まして、次の諸表を作製いたしました。之は採色（ママ）せる線又は円を以て表して、先般開催の婦人博覧会に出品して好評を博したものであります。（後略）

『県第一高等女学校史』にも「結婚に関する調査」として記述されている（429-431 頁参照）。

112）「地位表示機能」「地位形成機能」に関して、天野郁夫「教育の地位表示機能について」（『教育社会学研究』第 38 集、1983 年、44-49 頁参照）などで指摘されている。このような調査が行われたということは、井上好人「地方における実科高等女学校利用層の社会的性格―大正期の石川県能美郡立実科高等女学校入学者の分析―」（金沢星稜大学編『人間科学研究』第 13 巻第 2 号、令和 2 年、1-13 頁）が述べるように、「中等学歴を取得したことが、憧れの『妻』の座を射止める手段として意味付けされた」ことを示していよう。

113）大正 2 年本科卒Ｈ・Ｃ、『あゆち』15 号、大正 10 年 12 月、122 頁。

114）大正 2 年本科卒Ｈ・Ｃ、『あゆち』15 号、大正 10 年 12 月、122-123 頁。

115）昭和 10 年本科卒Ｋ・Ｙ、『あゆち』39 号、昭和 16 年 12 月、62 頁。

116）昭和十年本科卒業　Ｓ・Ｍ、『あゆち』39 号、昭和 16 年 12 月、58 頁。

117）愛知県文化会館図書部編『明治以降愛知県史略年表』、昭和 51 年、55 頁参照。

118）『県第一高等女学校史』、317 頁参照。

119）前掲、山﨑貴子「戦前期日本の大衆婦人雑誌にみる職業婦人イメージの変容」、106 頁。

120）昭和 14 年の金城女子専門学校入学者について、近藤武一編『金城学院 70 年史　1889-1959』（金城学院、昭和 35 年）によると、昭和前期の「生徒募集は決して楽ではなかつた」ようで、「専門部の国文、英文、予科の志願者が少く、県内は勿論、隣県の女学校へも手分けして職員が訪問、勧誘をして歩いた」（同書、76 頁）との記述が見られた。昭和 14 年の附属高等女学部からの入学については、「専門部入学者は 167 名（国文 14、英文 15、家政 66、家庭 66、予科 6）内、高女部出身者 35 名であつた」（同書、82 頁）とあり、およそ 21.0％となる。長野県女子専門学校本科卒業生の出身高等女学校はおよそ半数が長野高等女学校であった（拙稿「長野県長野高等女学校における卒業生の進路」、36 頁参照）。また、金城女子専門学校学友会編『みどりの　第弐拾七号』（昭和 13 年 12 月、82-83 頁）には、「入学志願者及入学者数調（四月七日現在）」として、下表のような「高女部」「専門部」入学者の出身学科等が記されている。これをみると、専門部入学者のうち、附属高等女学部や予科から入学した者は 1 割程度になる。

区　　別	入学志願者数	入 学 者 数	備　　考
高女部　一学年	490	224	
二学年	—		
三学年	—		
四学年	—		
五学年	—		
計	490	224	
専門部　国文科	8	8	内一人予科ヨリ 三人高女部ヨリ
英文科	19	18	内四人予科ヨリ 六人高女部ヨリ
家政科	49	40	内四人高女部ヨリ
家庭科	48	48	内一六人高女部ヨリ
予　科	4	—	
茶　道　科	53	53	
花　道　科	47	47	
音　楽　科	35	27	
タイプ ライター科	47	46	
計	310	287	

※縦書きを横書きに、漢数字を算用数字に改めた。
※「計」は筆者が付記した。

121) 吉田あけみ・藤原直子・小倉祥子「名古屋の女子教育の変遷」椙山女学園大学研究論集編集委員会編『椙山女学園大学研究論集　第 46 号（社会科学篇）』椙山女学園大学、平成 27 年、51-61 頁参照。

122) 前掲、結城陸郎『愛知県近代女子教育史』、248-249 頁参照。

【謝辞】本研究を進めるにあたり、川口雅昭人間環境大学名誉教授、矢田貞行東海学園大学教授に御指導賜った。また、名古屋市蓬左文庫様、東海学園大学名古屋キャンパス図書館諸氏に、御高配・御助言を賜った。ここに謝意を表する。なお本稿は、中国四国教育学会第 74 回大会（於・香川大学）「教育史Ⅱ」部会で令和 4 年 12 月 4 日に行った研究報告「名古屋市における高等女学校卒業生の進路」に加筆、修正を加えたものである。